

シベリア鉄道で兵隊さんと連夜の飲み会 ㊦

近藤 節夫 (エッセイスト)

若いロシア兵とはお互いに最初のうちは距離があり態度がぎこちなかったが、アルコールを飲み始めるとぐっとくだけて来た。3人は揃いも揃って酒好きだった。それもロシア人らしく大酒飲みだった。

次第に気心が知れてくるにつれ友だち感覚になり、昼間は途中のローカル駅で買い込んだオームリの燻製、サラミソーセージ、ピロシキ、ペリメニなどロシアの田舎料理をアルコールとともに味わった。

列車は首都モスクワへ向かって静かにゆっくり進んでいた。雪原と白樺林がどこまでも続き、単調ながらも車窓の外には現実の世界とは思えない異質な人間模様や自然の光景が繰り返された。晴れた夕方にはまぶしいほどのレインボーカラーに染まる夕焼けシーンも見られた。途中駅で停車する度にデッキにまで押し寄せてくる行商のおばさんたちから手料理や地元のビールを買い求めた。長い停車時間には駅前のカフェ風のお店に入ってコーヒーを飲みながら地元の人たちとジェスチャー交じりで中途半端な会話を楽しんでいた。

本番は夜の飲み会だった。食堂車で夕食を済ませて戻って来るのを3人は待ち構えていて、早速室内で酒盛りが始まり、つい話に熱中のあまり毎晩床に就くのは真夜中の1時を過ぎていた。若い兵士たちと盃を交わしながら、通じない言葉で話を続けていた。持ち込んだ2本のウィスキーは、あっという間に飲まれてしまい、彼らが持ちこんだウォツカや、途中駅で買い求めた地酒を毎晩たらい回しにして飲みまくった。まさに酒浸りの1週間だった。今では禁酒状態に近い筆者も、その時は列車内で生来の酒好きロシア兵と渡り合ったものである。こうして終着モスクワ駅に到着する直前まで明るく気の好い3人の酒豪とは肝胆相照らす



ウラジオストックからモスクワまで同じコンパートメントとなつた3人のロシア軍兵士

仲となり道中ずっと楽しく賑やかに飲み続けていた。

雪が降りしきる中で点々と見られる沿線の集落では、注意深く見ていると足元がふらつきながら歩いている千鳥足の男どもの姿がしばしば見られた。アルコール以外にこれという楽しみもないのだろうかとか散居集落の男たちが気の毒に思えた。かのエルツィン元大統領でさえ酔っぱらって橋から川へ落っこちたエピソードがあるほど根っから酒好きなロシア人にとっては、酒なしにはいられないのだろう。